琉球大学学術リポジトリ

珠江三角州地域をめぐる先史文化研究

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2016-01-27 キーワード (Ja): 珠江三角州地域, 先史文化, 印紋陶, 石錘, 地域設定 キーワード (En): 作成者: 後藤, 雅彦, Goto, Masahiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33145

珠江三角州地域をめぐる先史文化研究

後　藤　雅　彦

A Study of Prehistoric Culture in Pearl Delta Area

要約

東南中国の地域をめぐる考古学研究として、珠江三角州地域をとりあげ、まず、時間軸の設定を再確認し、周辺地域との関わりを時間的推移の中で見直した。また、近年の新しい研究課題として、地域内における遺跡差及び遺跡間の関係をあげることができる。本稿でも、印紋陶や石錘を例にしながら、東南中国という広い地域単位での位置付け、一地域内での遺跡差の両側面から検討を加えた。そして、商代併行期と言う時代の転換期において、外からの殷系文化の南漸と言う外的要因と共に、内的要因として、特定の素材や製品の広がりにみる地域内部のネットワークが強化されていることに着目し、さらに、中核的な遺跡の存在を考えた。

キーワード：珠江三角州地域　先史文化　印紋陶　石錘　地域設定

はじめに

本稿で扱う福建省・広東省が位置する東南中国[1]は、「百越」が雑拠した地域として知られ、その源流として、印紋陶を指標とする文化的まとまりが注目されている。筆者は、これまでに東南中国における各地の文化様相を明らかにする一方、どの方面に共通性が認められるか検討してきた。

近年、珠江三角州地域における貝塚及び砂丘遺跡の発掘調査が進展し、その成果は、中国ばかりでなく、環東中国海地域の先史文化研究の進展に大い

に寄与するものと考えられる。

また、珠江は、西江・北江・東江の3支流からなり、各支流が下流部で三角州（珠江三角州）を形成し、さらに分流して南中国海に注ぐ。このように珠江三角州地域は、河川水系によって、内陸各地と結ばれていると考えることができ、東南中国に展開した地域的な文化間の動向を把握する上で、重要な位置を占めると言える。

そこで、本稿では、珠江三角州地域を舞台とした地域的文化の動態を、外との関係（周辺地域との関係）から探求する。この問題について、筆者は新石器時代後期を中心に検討したことがあるが（後藤 1996）、その前提として時間軸の設定を再確認し、周辺地域との関わりを時間的推移の中で見直してみる。また、近年の新しい研究課題として、地域内における遺跡の態様及び遺跡間の関係があげられる。本稿でも、従来の見解を整理しながら、最近の調査、研究事例を加えて、その問題の所在を明らかにしたい。

1　珠江三角州地域の位置付け

まず従来の研究から、東南中国或いは行政単位である広東省の中で、先史時代の「珠江三角州地域」を如何に把握してきたか概観し、これを叩き台にして、「地域」をめぐる考古学的研究について検討していきたい（第1・2図）。

中国新石器時代において、地域的に展開した諸文化を捉える研究の代表として、蘇秉琦氏の「区系類型」説がある（蘇、殷 1981）。蘇氏らは、中国大陸を6大区系に区分し、その一つに広州を中軸とした南方区系を設定した。そして南方区系は、鄱陽湖－珠江三角州を中軸とし、さらに江西北部（仙人洞－山背、築衛城－呉城文化）、北江流域（石峡文化）、珠江三角州一帯に細分した。この内、北江流域と珠江三角州地域は、広東省内でも発掘調査が進展し、時間的変遷や文化内容をある程度、把握できる地域である。両地域を含めた広東省における地域設定について、朱非素氏（1984）は、新石器時

代後期（後述する本稿の第3期〜第4期に相当する）を対象にして、広東北部（北江流域）、広東東部（韓江中流域と韓江三角州）、珠江三角州地域、雷州半島と海南島地区に分けている。また楊式挺氏（1986）は、これに広東西部（西江流域）を加えて、新石器時代の地域設定を行なっている。

こうした地域設定は、地理的な区分を前提としたものであると言えるが、次に、東南中国の地域的な特徴示す考古資料として、印紋陶、石器及び墓葬をとりあげた研究を整理する。

まず、印紋陶の「地域」に関する研究を概観してみる。1950年代から60年代にかけて、長江以南の中国東南部の先史文化として、「印紋陶文化」が捉えられ、その中で地域差が指摘されていた。70年代になると、印紋陶にみられる地域差を強く認識するようになり、典型的な遺跡を指標とする文化設定が行なわれ、各地の土器群の把握がなされるようになった。その成果として、1978年に江南地区印紋陶問題学術討論会が開催された（彭 1981）。

西江清高氏（1995）は、印紋陶をめぐる考古学研究を整理し、印紋陶と越式青銅器の広がりから導き出された中国東南部各地の文化的まとまりが、その後の人文地理的な構成に影響を与えたか考察を進めている。そして、印紋陶を指標とする考古学的領域と現代の漢語方言の分布との相似性を指摘し、やや長い引用になるが、「歴史地理学的な予測を仲介とすることで、ある場合には、今日の人文地理的な「地域」の成り立ちを、先史時代・初期歴史時代を扱う考古学上の「地域」を出発とした歴史的文脈の中で語ることが可能になるかもしれない。」としたのは、重要な問題提起である。

次に、有段石斧と有肩石器、有段有肩石斧の分布に着目した研究がある。まず、梶山勝氏（1978）は、有段石斧と有肩石器がほぼ広東省を境に異なった分布領域を示した。さらに、両者の分布領域の接点である広東省中部を中心に、有段有肩石斧が分布することを指摘した。また傅憲国氏（1988）は、有段石斧と有肩石器の分布状況を整理し、広東東部と北部（北江流域）では有段石斧が多く、広東中部（珠江三角州地域）と南部では有肩石器が多く出

第2図　珠江三角州の主要遺跡
（香港博物館1993）の分布図をもとに作成

第1図　珠江三角州の位置

土していることから、有肩石器の分布の中心は珠江三角州地域であるとした。

墓制については、梶山氏（1992）が、広西壮族自治区と広東省の新石器時代晩期（後期）の墓葬資料を検討している。同地域において二次葬が広く行なわれていたが、頭位方向などの埋葬習俗や副葬品を分析した結果、広西壮族自治区、広東省の中部低地地区（本稿での珠江三角州地域）、広東省の北部地域の3地域に各々特徴があることを示した。梶原氏が指摘したように、二次葬という葬制を行なう思想の広がりと、実際に行為としてなされた二次葬の現れかたという地域差は、重要な問題提起であると考えられる。また梶山氏は、墓制に加えて、社会習俗に関わる抜歯をとりあげ、その分布が広東省の中部地区に限られていることから、他の2地域とは異なった地域独自の共同体社会のありかたを示すと論じた。すなわち、特定の要素から地域差を捉えるにあたって、その指標となる資料の性格付け、そして要素の組み合わせという視点は重要である。

ところで、珠江三角州地域内部の地域設定として、珠江口という珠江河口の両岸、河口内の島嶼を包括する地域単位を設定する場合があり、さらにその東側と西側に分けられる（曾 1995）。また香港において尖沙咀と羅湖を結ぶ南北線を中軸として、その東西で遺跡分布の濃淡に差違があることが指摘されている（呉 1998）。

また西谷大氏（1997）は、新石器時代中期を中心に、内陸河川からデルタ地域に居住する集団と大陸沿岸部と島嶼に居住する集団の棲み分けを捉えている。その中で、「地域設定は、最初に地理的な区分があるのではなく、むしろそれを超えた集団の動向を把握した上で、地域性を想定すべき」とした点は、示唆に富むものである。

2　時期区分の現状と問題点

地域をめぐる研究の前提として、地域内における時間的的変遷を明らかに

する必要がある。そこで、珠江三角州における時期区分について、その研究状況を整理する。

（1）時期区分の現状

近年、珠江三角州地域において、発掘調査の進展に伴って、編年研究が盛んである。しかしながら報告が概報的なものも多く、出土土器を層位的に把握できる資料が少ないのも現状である。また東南中国において曇石山文化、石峡文化など中国考古学界で一般化した文化名が命名されているのに対し、珠江三角州地域では、研究者によって命名された文化名が異なっており、帰属時代・時期、文化名などに関して諸説認められる。その一つの要因として、周辺地域の年代観をそのまま当てはめている傾向も否定できないのではないだろうか。

本稿では、出土土器によって編年が可能である新石器時代中期から商周時代併行期まで7期に区分して整理してみたい[2)]。

第1期（第3図－1～3）

広東省後沙湾遺跡第6層（李 1991a）、大黄沙遺跡（深圳博物館他1990b）、蜆殻洲遺跡（広東省博物館他 1991）を代表とし、縄紋丸腹釜（1）、彩紋が施された圏足盤（3）が指標となる。香港側では、当該時期を東湾Ⅱ期－黒沙期（大湾式彩陶盤時期）に区別している（鄧 1990）。東湾Ⅱ期の主な土器は縄紋丸腹釜であり、黒沙期になると、丸腹釜に彩色紋様が施された盤が共伴する。これは、彩陶の出現によって時期の細分が可能であることを示し、彩陶の系譜を考察する上でも重要である。

第2期（第3図－4・5）

広東省草堂湾遺跡第5・6層を代表とする（梁、李 1991）。縄紋丸腹釜（4）、圏足盤（5）を主体とし、基本的に第1期の土器群を継承するが、彩陶は消失する[3)]。

第3期（第3図－6～8）

当該期の代表的な遺跡としてし、近年調査された広東省銀洲遺跡遺跡（第1期（朱 1995）、香港湧浪遺跡上層（香港古物古蹟辦事處 1997）などがあげられる。先行時期の代表的な圏足器が消失し、鼎（7）、罐（壺）、圏足鉢（8）が出現する。壺に低い圏足が付くことが特徴である。紋様では葉脈紋、曲折紋などが出現するが、紋様単位が重複するものが多い。珠江三角州地域では実際、後続する印紋陶を主体とする時期との区別があまり整理されているとは言えない。しかし、最近調査された三水銀洲貝塚遺跡において釜形鼎が出土しており、朱非素氏（1995）は、石峡文化との関係を指摘し、時期の細分を行なっている。すなわち、当該期は北江流域の石峡文化期及び石峡中層文化への移行期に相当すると考えられる。

第4期（第3図－9～11）

河宕遺跡第3層（楊、陳 1981）、竈崗遺跡（広東省博物館 1984）、銀洲遺跡第2期、後沙湾遺跡第2・4層を代表とする。第3期より壺の圏足が高くなり（10）、曲折紋・方格紋・雷紋などを施した印紋陶が増加し、規則正しい紋様単位の配置がみられる。

印紋陶は、以前「印紋陶文化」と呼称されていたように、ほぼ同時期に東南中国において出現しており、まさに中原において初期王朝が形成された時代の転換期に相当している。そのため時期呼称として、一般的に商周併行期もしくは青銅器時代前期として把握されているが、これでは東南中国独自の時期編年とは言いがたく、当該時期以降を先越系文化期と暫定的に設定したい。

また従来は、本稿の第3期～第5期までを大きく一つの時期として、周辺地域との比較が論じられていた。しかし、こうした時代の転換期を考えるにあたって、珠江三角州地域の時間的な変遷を明らかにする必要がある。

すなわち、第4期は新石器時代後期から先越系文化期への移行期に相当する。

第5期（第3図ー12〜16）

河宕遺跡第2層、東澳湾遺跡（広東省博物館他 1990）、亜婆湾遺跡第1組（唐、李 1991）[4]、銀洲遺跡第3期、茅崗遺跡（広東省博物館 1983）を代表とする。凹底罐（13）、鴨形壺（鳥形壺）が出現する時期であるが、圏足盤とともに鉢（16）が増加し、煮沸具は継続して縄紋釜（12）がみられるなど、地域的な特徴も示している。

凹底罐、鴨形壺は、中村慎一氏が設定した凹底罐複合（華南の初期金属器文化）の要素に含まれるものである（中村 1996）。また片口をもつ圏足壺（15）も同時期に出現し、点的な分布であるが、鴨形壺とほぼ同様な分布を示す。

第3図ーa　珠江三角州の主要土器　縮尺＝1／10
1〜3：後沙湾（李 1991）4・5：草堂湾（梁、李 1991）
6〜11：銀洲（朱 1995）（6〜11は示意図とされ、縮尺は不明）

第6期（第3図－17・18）

亜婆湾遺跡の第2組、及び水涌遺跡第2組（趙 1991）の土器群を代表とする。壺（18）は、片口を有するもので、前時期の圏足壺（15）から変化したものと判断できる。報告では、釉陶（灰釉陶器）を伴うとされる。凹底罐複合の地域的な展開を示すものとして注目される。

第7期（第3図－19・20）

鶏山遺跡（李 1991b）の出土土器を代表とする。圏足鉢（20）が代表的な器物になり、F字紋が施された平底罐（19）を伴う。

また、こうした土器の型式学および層位学を踏まえた上で、理化学的年代法（14C年代法）をもとに、その年代観が求められている。最近、発表された商志馥、毛永天両氏（1997）の論考でも同様であり、本稿の時期区分と対応させると以下のようになる。

第3図－b　珠江三角州の主要土器　縮尺＝1／10

12・13：東澳湾（広東省博物館他1990）14～15：亜婆湾（唐、李 1991）

17・18：鶏山（李 1991）19・20：水涌（趙 1991）

新石器時代

中期前段	BC4500—3600年	（第1期）
中期後段	BC3600—2900年	（第2期）
晩期（後期）前段	BC2900—2400年	（第3期）
晩期（後期）後段	BC2400—1500年	（第4・5期）

ところで、珠江三角州地域も他地域から孤立していたわけでなく、周辺地域との相対的な年代を確立する必要がある。とくに西谷氏（1997）も、指摘しているように北江流域の石峡文化との比較が重要であろう。現段階では、以下のように整理しておきたい。

（珠江三角州）	（北江流域）
第1・2期	前石峡文化
第3期	石峡文化（～石峡中層文化）
第4・5・6期	石峡中層文化
第7期	石峡上層文化

（2）問題の所在

現状では、新石器時代中期から後期、及び新石器時代後期から先越系文化期という移行期における編年研究になお問題が多く、暫定的なものとして考えておきたい。また珠江口の砂丘遺跡では、新石器時代中期の上に無遺物層を挟んで印紋陶を主体とする包含層が直接堆積している事例がある（区1993）。こうした断続的な居住の痕跡を示す状況は、珠江口における砂丘遺跡の特徴の一つとしてあげられ、後述する珠江三角州地域における遺跡の有り様にも関わる問題である。

さらに、周辺地域との相対的な年代観を与えるには、やはり北江流域の時期編年の細分も課題であり、代表的な遺跡である石峡遺跡の正式な報告が待たれる[5]。

こうした編年研究にあたって、今後細分化の方向が求められることは、遺

跡間の関係などを吟味する上でも、一つの課題となる。資料の蓄積ばかりでなく、方法論にも関わるものと思う。

3　各時期における周辺地域との関係

ここでは、各時期における周辺地域との関係について、その問題の所在を明らかにしたい。

まず、第1期を中心とした新石器時代中期について、その代表的な要素である彩陶の起源と系譜が問題である。何介鈞氏（1994）によれば、洞庭湖沿岸の彩陶は、皀市文化下層期から大溪文化への移行期に相当する湯家崗遺跡などで帯状に黒彩が施されるものがみられ、その後、大溪文化中期にかけて彩陶が流行する。紋様としては水波紋、渦巻紋などがあり、これらの紋様は珠江三角州のものと類似する。しかし、彩紋が施される器種は、洞庭湖沿岸では罐が多く、次に盤などである点に差がみられる。このように彩陶を長江中流域の大溪文化との関係の中で捉えることができるかどうか、まず中間地域の状況把握、珠江三角州内における彩陶の出現－展開－消失という過程の中で検討しなくてはならない。

次に、第3期（新石器時代後期）については、拙稿（1996）ですでに検討したので、詳細は省くが、珠江三角州地域に石峡文化を経由して、長江下流域の良渚系文化要素（石鉞など）が移入されており、そこには受容者側の主体性が窺えた。

また、珠江三角州地域では、土器（煮沸具）は釜が一般的であるが、銀洲遺跡では鼎が出土している。この鼎の特徴として、器形の特徴は石峡文化に通じるが、紋様は在地のものが施され、墓葬から出土している（朱 1995）。しかし、鼎という当時、石峡文化から内陸側を経由して長江流域一帯で一般的な煮沸具が、珠江三角州地域にも導入されながら、同時期の釜を主体とする煮沸形態を変革するには到らなかったようである。これによって、外来系

という新しい要素が導入されても、既存の文化的体系の中に組み込まれる過程が読みとれる。

そして第4期以降は、印紋陶が出現する時期であり、珠江三角州地域も前述した凹底罐複合の中に組み込まれる。中村氏（1996）は、この凹底罐複合について、殷系文化の拡大によって華南に成立したとし、強力な青銅器文化に対峙して、その反動を物質文化として反映したのが凹底罐複合というまとまりであったと考えている。すなわち、殷系文化との対立という構図のもとに、華南の斉一性を捉えたところに、大きな意味がある。

一方、地域差に眼を転じてみるために、鴨形壺をとりあげてみたい。陳国慶氏（1991）は、各地における鴨形壺の年代とその広がりから、長江下流域を起源にし、周辺に伝わったと論じている。しかしながら、現時点で、鴨形壺の分布は点的なものであり、鴨形壺の拡散について、具体的な文化交流を復元するのは難しい。また鴨形壺の特徴として、注ぎ口と把手をもつことが

第4図　馬橋遺跡出土の鴨形壺

（上海市文物管理委員会1978）縮尺＝1／5

1：長頸形・有圏足タイプ，2：短頸形・無圏足タイプ

あげられるが、頸部の形態による長頸形と短頸形、圏足の有無による大別においても、各地の鴨形壺とされた壺形器に形態差が認められる。長江下流域の良渚文化期では、短頸形・無圏足タイプで、商周併行期の馬橋文化期になると、長頸形・有圏足タイプが加わる（第4図）。一方、管見に限るが、東南中国の鳥形壺は、長頸形・無圏足タイプ、短頸形・有圏足タイプ、短頸形・無圏足タイプに分けられ、珠江三角州地域の咸頭嶺遺跡（深圳博物館他 1990b）では、短頸形・無圏足タイプが出土している。さらに紋様などを加えると、個体差が顕著になると考える。このように、鴨形壺は、全体の形状が水鳥の姿に似るという共通点と、実際に土器自体に顕在化する相違点の両側面が認められる。これは、まさに印紋陶という東南中国に広がる共通性と各地の独自性に関わる問題と理解されるのである。

また東南中国に共通する各要素の起源について、現時点では明らかでないが、各地における展開が問われる。すなわち、珠江三角州では、鴨形壺と同様な分布をもつ圏足壺も、第5期に出現し、第6期になると、形態的に変化する。また第6期には、釉陶と言う新しい要素が出現するという過程を辿ることがわかる。

4　珠江三角州における遺跡の動態

これまでに検討したのは、珠江三角州を一つの地理的単位としてみた場合の周辺地域との関係である。前述したように、近年の研究では、珠江三角州地域内における遺跡の動態が注目されている。

(1) 従来の見解

珠江三角州の遺跡として、代表的なものに貝塚遺跡と砂丘遺跡が知られる[6]。李岩氏（1989）は、本稿で設定した第5期に属する遺跡を立地条件及び出土遺物から2類型（茅崗類型・東澳湾類型）に区分している。茅崗類型

は、河川の両岸の台地上に立地し（貝塚遺跡）、土器を多く保持する定着的な農耕社会を形成する。東澳湾類型は、海浜地帯に立地し（砂丘遺跡）、漁撈を主体とした生業形態が想定される。

ここで、問題となるのが、砂丘遺跡の性質であり、これは、自然環境や海面変遷の問題にも通じる。厳文明氏（1991）は、砂丘遺跡の遺跡範囲が狭く、文化層も薄いことから、短期的な居住であるとし、同地域が毎年夏・秋に数次にわたって台風がくるが、こうした砂丘上では、台風に耐えうることができないとして、冬春（台風の季節の後）という季節に定期的に移動した集落の可能性を指摘している。厳氏は砂丘遺跡の生業として漁撈・採集の占める割合が高かったと指摘しているが、漁撈・採集生活と移動生活の具体的な状況については、さらに検討を要するであろう。

しかし、厳文明氏が想定した砂丘遺跡にみる移動性のあり方は、沿海地域間の恒常的なネットワークを形成する要因の一つとなったのではないだろうか。また、珠江三角州地域内における遺跡の態様に関する議論に、大いに影響を与えたことは間違いない。

なお、珠江三角州地域における環境変化については、李平日氏他によって研究が進められており、気候及び海岸線の変化が示されている（李他 1991）。

（2）貝塚遺跡と砂丘遺跡

ここで、貝塚遺跡と砂丘遺跡の出土遺物を比較検討する上で、注目すべき点をあげてみたい。

まず土器については、李岩氏（1989）は、夾砂陶と泥質陶の比率から、両者の差違を指摘している。砂丘遺跡（東澳湾遺跡）は先越系文化期になっても、新石器時代中期以来、継続して夾砂陶が主体であるのに対し、貝塚遺跡においては、第4期以降、泥質陶が増加し、過半数を占めるようになる。これは、貝塚遺跡出土の土器器種が増加し、多様化することと関連する。紋様についても、砂丘遺跡では縄紋が継続して主体であるのに対し、貝塚遺跡で

は曲折紋、方格紋が増加する傾向にある。

また、珠江口の砂丘遺跡に広く分布する鉢形釜も注目される[7]。鉢形釜は、黒沙遺跡（香港中文大学中国研究所 中国考古芸術研究中心 1996）、東澳湾遺跡、白芒遺跡第1期（鄧、商、黄 1997）などで出土しており、本稿の第5期に帰属すると考えられる。白芒遺跡では、土坑墓の副葬品として鉢形釜が凹底罐と共伴して出土している。

そして、第4期以降、東南中国で広くみられる印紋陶が出現し、珠江三角州地域では、紋様の種類として曲折紋、方格紋が一般的であり、北江流域の石峡中層文化との共通性が認められる。しかし、珠江三角州地域内においても、曲折紋・方格紋の割合には遺跡差がみられる。呉家園遺跡中層（3c層）（区、莫 1998）、東澳湾遺跡、河宕遺跡第2層を例にすると、方格紋1に対する、曲折紋の比率は1.2、3.0、17.8とその差は大きい。

このように各遺跡の出土土器を、紋様構成、器種構成などを加えて、数量的に比較することによって、前述した印紋陶にみる東南中国の各地の共通性と独自性を考察する上で、一つの解決の糸口を得ることができるのかもしれない。しかし、現時点では、資料的な制約もあり、今後の課題にしておきたい[8]。

次に、生産工具である石器については、李岩氏も指摘しているように、砂丘遺跡で石錘が多く出土しており、貝塚遺跡と比較して、特徴の一つとしてあげることができる。また珠江三角州地域の石器組成では石斧、とくに片刃石斧が主体であり、有肩石斧、有段有肩石斧という分類が一般的に知られるが、この片刃石斧の分類と組合せが問題となってくるものと考える。例えば、小澤正人氏（1994）は、貝塚出土の有肩石斧を2種類に分類し、土掘り具と加工具という機能・用途を想定している。この土掘り具と想定される有肩石斧の分布や片刃石斧のセット関係が注目される。

（3）珠江三角州地域の石錘

前述したように石錘は、珠江三角州地域の砂丘遺跡に多く出土している。さらに同じ砂丘遺跡の中でも、珠海棠下環遺跡（広東省文物考古研究所他1998）（第5期）は、出土量の多さや石錘の大きさに他遺跡と異なる点が指摘されている。このように石錘の分布は、珠江三角州地域内の遺跡差を示すと考えられる。

まず、珠江三角州地域の石錘を他地域との比較の中で、位置付けてみたい。東南中国という大きな地域単位では、福建閩江流域までの土錘の分布範囲とは異なり、石錘は珠江三角州地域を中心に北江流域まで広がっている（後藤1996）。

ここで、東南中国における石錘・土錘を概観してみる。閩江下流域では、土錘が曇石山遺跡下層（福建省博物館 1976）から出現する。まず下層では両端に溝が走る円柱状のものがみられ、中層には、さらに中央を横断する溝が走るものが加わる。これらの土錘に、渓頭遺跡上層（福建省博物館 1984）では管状土錘を伴う。抉りの入る土錘は、揚子江（長江）型土錘と呼ばれ、長江流域の水稲稲作地帯でみられる。甲元真之氏（1993）の研究によれば、揚子江型土錘と管状土錘は馬家浜文化期から伴出し、時間的にほぼ同様に分布域を拡大し、その後も多くの遺跡において共伴することから、錘の使われ方としての差異が認められる。さらに両者の年代的な広がりをみると、中国南部において、稲作栽培の拡大と一致するという見解は、稲作と漁撈をセットとして考える点でも興味深い問題である。一方、珠江三角州地域では自然礫に抉りや溝が走る石錘が一般的にみられ、揚子江型土錘が及んでいないことが指摘できる。これは、江南系稲作文化の南への広がりと各地の受容を示すものとして、珠江三角州地域と周辺地域の関りを示す一つの現象と理解しておきたい。

また周辺地域に石錘の類例を求めるならば、台湾の事例があげられる。台湾では、戦前から東海岸と西海岸の相違点として、石錘の差が注目されてい

る[9]。そうした中、鹿野忠雄氏（1952）は「其の後の調査によれば、両型は南北地方に於てオーバーラップして居る。而して若し之等の石錘が同一の用途（例えば漁撈用等）にもちいられたものとすれば、東西文化相の比較に於て有益なる材料を提供するものであろう。」としている。

ところで、珠江三角州地域では、管見によれば、第3期から明確に縄を緊縛する為の細工がなされた石錘が出現するが[10]、石錘の使われ方に遺跡差が認められる。

ここで、石錘の分類について検討してみたい。

石錘の形態的な分類には、まず手ごろな石を選ぶにあたって、全体の形状が配慮され、次に抉りや溝などの縄の緊縛に関る要素が附加されるという二つの側面があると考えられる。そして網の錘としての機能を果たすには、物理的な配慮として、大きさ、特に重量が関わるが、残念ながら、重量を個別に報告した事例はほとんどみられない。そこで、本稿では、以下のように珠江三角州地域における石錘の形態的な属性をあげる。

①形状（平面形と断面を合わせて分類）

Ⅰ類　円盤状－扁平で平面が楕円形或いは円形を呈する（ほぼ長さ1に対し、厚さが0.4以下の比率）

Ⅱ類　円柱状－Ⅰ類に比べ、厚い（ほぼ長さ1に対し、厚さ0.3～0.5の比率）

②網の緊縛要素

a抉り（ほとんどが長軸中央に抉りが施される）

b溝　（溝の位置及び数で細分される）

b1：中央に一槽

b2：両端に各一槽（計二槽）

こうして、石錘を両側面に分けると、円柱状の石を用いた場合、縄の固定を強化する為に溝を施していることがわかる。すなわち、珠江三角州地域における石錘の分類としてはⅠa類、Ⅱb1類、Ⅱb2類が抽出できる（第5図）。

なお、Ⅰａ類は「腰形」、Ⅱb1類は「凹槽」と呼ばれる（区、莫 1998）

ところで、珠江三角州地域における分布をみると、中央に抉りが入るⅠａ類が広く一般的であるが、例えば香港湧浪遺跡上層ではこれにⅡb1類、Ⅱb2類が加わっている。また呉家園遺跡中層でもⅡb1類がみられる。両遺跡とも香港側に属しており、こうした分布の差違が、珠江口における東側と西側の差違などの地域差に通じるか、限られた資料から判断することは現時点では難しい。いずれにしても、遺跡によって、保有する石錘に形態的な差違が認められるのである。

また石錘の大きさは、前述したように珠海棠下環遺跡で大型・中型・小型と分化し、数量的に中型が多く、次に大型、そして小型という順になる。他遺跡の石錘は、基本的に棠下環遺跡の中型に属している。

このように石錘の形態や大きさの差から、遺跡によって、石錘の使われ方が異なっていた可能性が示唆され、石錘を漁網錘として考えるのならば、漁場、捕獲対象物の差を示すものかもしれない。

すなわち、珠江三角州地域の石錘は、東南中国という広い地域単位での位置付け、そして一地域内での使われ方の両側面から検討する必要がある。

第5図　湧浪遺跡出土の石錘

（香港古物古跡辦事處 1997）縮尺＝1／4

1：Ⅰａ類，2：Ⅱb1類，3：Ⅱb2類

5　近年の調査・研究事例から

(1) 砂丘遺跡の調査研究

近年における珠江口の砂丘遺跡の発掘調査で、柱穴、竈坑、土坑や紅焼土などの居住に関わる遺構、その周辺からは墓葬も確認された例が増加している。こうした砂丘遺跡の調査状況から、一概に砂丘遺跡を非定住的な性格として捉えることができなくなってきた。

こうした状況は、昨年11月から本年１月まで開催された香港中文大学十年考古収穫の展示でも住居址関連のコーナーが設けられていることからも窺え、砂丘遺跡における居住のあり方を遺構から検証することが課題であろう。

そうした中、李果氏（1997）は、砂丘遺跡を「主要遺跡」と「次要遺跡」に分けて理解したことは、示唆に富むものと言える。主要遺跡の特徴には、遺跡の規模が大きく、住居址や墓葬を伴い、出土土器の器種も比較的多いという点などがあげられている。

(2) 貝塚遺跡の調査研究

袁靖氏（1995）は、珠江三角州の貝塚の存在する時期として今から約6000～3000年前とし、その立地として、丘陵型、台地型、海岸型に分け、構成貝類によって内湾型、河口型、河岸型に区分し、その分布について論じている。さらに、貝塚の消失の理由として、他地域との共通性が多くなる時期とほぼ同一であることから、地域間交流もその一つの背景としながらも、数千年の間に海岸線の南下とそれに伴う平野範囲の拡大が、当時の人々の生業活動に影響を与えたとした。また農耕文化の発展にも注意しなければならないと問題提起したのは重要である。

この貝塚消失の時期については、本稿の第６期以降の遺跡には貝塚を伴なう例はみられないようである。しかし第５期に帰属する河宕遺跡第２層は、貝層上面の堆積であり、第５期に相当する遺跡における貝層の有無が問われ、

一遺跡の形成過程を層位的に明らかにする必要があろう。

また、生業活動の復元について、最近の貝塚調査では、土層断面から柱状サンプルを採取するなどの調査研究が始まっており、動物遺存体の量的な分析の結果が注目される（銀洲遺跡聯合考古隊 1995）。

（3）遺跡の類型化と中核的な遺跡の存在

こうした様々な遺跡の状況を抽出し、その相互関係を解明することが重要であり、そのためには、遺跡の分布やその立地、規模など基礎的なデータが必要になる[11]。

そして、遺物組成などの検討によって、貝塚遺跡と砂丘遺跡の性格の差が明らかになるかもしれないが、両者ともに新石器時代中期から先越系文化期まで継続して存在しており、異なる生態系に基づく集落が、独立して恒常的に各々河口部や河川沿いそして砂丘上に形成されていた可能性が高い[12]。

むしろ、貝塚を伴う遺跡、砂丘上の遺跡の中で、類型化が進むことが望まれるように思う。

小澤正人氏（1994）によれば、貝塚遺跡は、その立地から2タイプ（竈崗タイプと茅崗タイプ）に区分される。竈崗タイプは、小丘上に居住域と墓域があり、斜面に貝層が堆積する。茅崗タイプは、低湿地に杭状建築があり、その周辺に貝層が堆積する。しかし、出土遺物の組成には明確な差異が認められないとしている。そこで、両者の違いを考察するには、その前提として時間差の有無を確認する必要がある。出土土器をみると、竈崗遺跡の報告で記載された分の土器は、茅野遺跡よりも古くなるが、遺跡全体の継続期間については、出土遺物の全容が明らかにされていない現状では判断を下すことができない。さらに、一遺跡の形成過程を明らかにしなくてはならず、当時の海水面の変化や沖積化などにも関るであろう。

また、砂丘遺跡についても、李氏が指摘した「主要遺跡」の中から、モノ、情報、人の集まる場所として、「中核的」な遺跡を抽出することが必要であ

る。

前述した形態や大きさによって分類された石錘は、使用方法の差を示唆するものであるが、各遺跡の出土遺物の様相も注目される。すなわち、形態的な変化に富む石錘を有する湧浪遺跡、呉家園遺跡、大きさの変化に富む石錘を有する棠下環遺跡は、同時期の砂丘遺跡の中でも、他の生産工具の出土量も多く、さらに土器の器種も豊富である。

（4）遺跡間の関係

このように遺跡の類型化として、デルタ上部を中心とした貝塚を残す遺跡と沿岸部の砂丘遺跡と言う大別、貝塚遺跡、砂丘遺跡の各々の中での類型という様々な段階を設定することができる。

類型化された遺跡は、各々の生態系に則した人々の営みが想定できるが、各遺跡が単独で存在したものでなく、一方で遺跡間の関係が問われる。

この問題に対する一つのアプローチとして、特定の素材や製品の分布は注目される。まず、別稿でもとりあげた西樵山産の石材を用いた石器（片刃石斧）の生産と流通があげられる。西樵山遺跡は、長期的な石器製作地及び石材採掘場として考えられ、その年代はかなり古くまで溯る可能性もあるが、珠江三角州地域の諸遺跡で出土する霏細岩製の有肩石器は、現時点でほぼ第４期以降に属すると考えられる。そして西樵山遺跡に近接する竈崗遺跡などでは、霏細岩製の未製品が出土しており、有肩石器の製作工程の中での位置付けが問われるが、西樵山遺跡と近隣の遺跡では、石器の製作段階においても、遺跡間の関係が窺える。一方、西樵山から離れた珠海県の棠下環遺跡では、霏細岩製の有肩石器が在地の石材で製作されたものと、製作技術においても差異があるとし、製品が搬入されたと報告している。

さらに、珠江口の砂丘遺跡で玉製品の生産が確認されており、その開始年代が問われるが、湧浪遺跡上層（第３期）、黒沙遺跡（第５期）などにみられるように、新石器時代後期から、先越系文化期にかけて活発化するようで

ある[13]。とく澳門黒沙遺跡では玉製品の未製品を原石個体識別の方法を用いて検討し、攻玉技術の復元を行なっている。今後、各遺跡における未製品と製品の分析から、玉製品の生産と流通の具体像が浮かびあがってくるであろう。

いずれにしても、珠江三角洲地域が外との関係を深めて行く時期に、内部において、特定の素材、及び製品の生産と流通が活発になっている現象は見逃せない。

まとめ

本稿では、東南中国の地域をめぐる考古学研究として、珠江三角州地域をとりあげた。まとめとして、以下の点を指摘しておきたい。

まず、珠江三角州地域の時間的推移を踏まえた上で、周辺地域との関係を整理したが、やはり時期区分の確立が当面の課題である。次に、珠江三角州地域における外来要素の受容の有り様が問題になってくると考える。これには、在地系文化の動態と外来系要素の導入が一次的なものか、継続的なものがどうか合わせて考慮しなくてはならない。第5期という大きな時代の転換期において、凹底罐や鳥形壺が広く分布するようになり、さらに第6期以降、灰釉陶器が一般化するように東南中国各地の斉一性が高まる。これは、隣接地域からの文化的刺激が継続的になり、外来系要素の導入と各地の受容というサイクルが繰り返され、その結果として地域の枠を越えて、文化の変遷過程を共有することが、その背景にあったと考えることができる。

また、「地域」をめぐる考古学研究には、様々アプローチが可能であろうが、珠江三角州地域の「地域性」を理解するにあたって、東南中国という広い地域単位での地域差と珠江三角州地域と言う一地域内での地域差、遺跡差という両側面からの検討が必要である。言い換えれば、地域内に所在する遺跡の態様から、珠江三角州地域と言う地域設定を再確認することが肝要である。前述した第5期を中心とした東南中国に広がる斉一性は、確かに華北の

殷系文化の南漸と言う外からの影響（外的要因）があったことは否定できないが、内的要因として、特定遺物の広がりに示される珠江三角州地域内でのネットワークの強化も看過できない。そして、中核的な遺跡の抽出が可能であれば、それらはネットワークの大きな節目に位置していたと考えたい。

要するに、珠江三角州地域の先史文化について、中国大陸の中での、或いは東アジア世界の中での理解が求められる。前者には中国大陸における地域間の交流、後者には稲作文化の拡散という研究テーマが含まれるであろう。一方、実際の研究手段としては、その目的に応じて、遺跡間の関係、さらに一遺跡の形成過程など、「空間」をみる枠組みのスケールを変えることが必要である。

謝辞

本稿を草するにあたって、西江清高氏、中村慎一氏、西谷 大氏には、論文を通じて、さらに常日頃、ご教示いただいている。また渡辺芳郎氏、小澤正人氏、小柳美樹氏からも貴重な助言を賜った。そして、広東省、香港の多くの研究者諸氏に、貴重な資料の提供や助言をいただいた。記して感謝申しあげます。

朱非素氏、古運泉氏、黄道欽氏、李岩氏、李子文氏（広東省文物考古研究所）鄒興華氏、孫徳榮氏、馬文光氏（香港古物古跡辦事處）鄧聰氏、黄韻璋氏（香港中文大学）李美樺氏（香港歴史博物館）

註

1）中国大陸での大きな地域設定として、中国東南部、華南などの名称がよく使われているが、その示す範囲を各々確認する必要がある。本稿の東南中国は、主に福建省・広東省を範囲とする。

2）BC.5000年以前について、香港では東湾Ⅰ期という礫石器遺存が設定されている(鄧 1990）。珠江三角州では、他に西樵山の細石器遺存があり、その位置付けが問われている。

3）第1期～2期の時期編年にあたっては、彩陶の型式変遷及び共伴する縄紋陶の型式学的研究が必要である。西谷氏（1997）は、層位的に土器群の把握ができる重層遺跡として咸頭嶺遺跡、大黄沙遺跡、後沙湾遺跡、草堂湾遺跡をとりあげ、本稿の第1～2期を大黄沙遺跡の層序をもとにⅠ期（5・6層）、Ⅱ期（4層）、Ⅲ期（2層）に細分している。

4）採集資料であるが、報告では遺物群として把握している。

5）石峡遺跡の報告には、すでに概報があるが（石峡発掘小組 1978）、第2次調査については、準備中であると聞く。

6）貝塚遺跡、砂丘遺跡は、その分類基準が異なるが、本稿では珠江三角州地域の遺跡を理解するために便宜的に使用する。

7）鉢形釜については、黒沙遺跡の報告書の中で詳細に検討している（香港中文大学中国研究所　中国考古芸術研究中心 1996）

8）広東省における一般的な土器片の記述では、夾砂陶か泥質陶、また胎土の色調を分け、その中で器種或は紋様を数量的に報告しており、各器種・器形の紋様構成については、詳細は明らかでないようである。

9）宮本延人氏は、1934年に東海岸と西海岸とが、文化上において相違点があるというのは、興味深く重要なことであるが、単に石錘の不同という一点より考察できるものではないと発表している（米沢 1987）。台湾における石錘は、2型式に大別される。一つは中央に切り目が入るものであり、もう一つは両端に溝が走るものである。前者は、東海岸一帯の平地、花蓮港から南の平野部、台東付近、さらに台湾の南端を廻って墾丁寮まで分布し、後者は台北から西海岸一帯、高雄地方まで広がる（宮本 1985）。

10）明確な縄の緊縛の痕跡がみられない場合も想定できる。香港の事例で、小礫石がまとまって出土し、縄を縛った痕跡も認められることから、網が放

置されていた状況を示すと推測している（区、莫 1998）。実際、礫石をもって錘として報告されたものは少ないが、「石球」とされたものに石錘と同様な機能も推測できるかもしれない。

11）1995年3月から4月に実施された調査で、貝塚遺跡19ヶ所、砂丘遺跡5ヶ所が踏査されている（珠江三角州地区考古調査小組 1995）

12）西谷大氏（1997）は、編年研究の基礎のもと、古環境と人々の生活の関りなど遺跡の動態的な研究を行ない、土器群の様相及び遺跡の空間分布を検討した。その結果、デルタ上部から珠江口、大陸沿海部までをテリトリーにする集団と沿岸部だけに遺跡を形成するタイプに分け、そこに各集団の棲み分けを読み取り、各文化間のネットワークを形成する契機になったと考察している。

13）鄧聰氏（1998）は、香港地区における玉製品（玦）の生産を3段階に分け、さらに周辺地域との比較検討を行なっている。大いに参考になる研究であるが、本稿の時期区分との対応など、稿を改めて検討したい。

引用・参考文献

小澤正人　1994「珠江三角州における貝塚に伴う集落」『東南アジア考古学』14，6～16

袁靖　1995「関於中国大陸沿海地区貝丘遺址研究的幾個問題」『考古』1995－12，6～16

何介鈞　1994「環珠江口的史前彩陶與大溪文化」『南中国及隣近地区古文化研究』香港中文大学，321～330

梶山勝　1978「南中国新石器時代晩期の文化領域について－雲南・広西・広東・福建を中心として」『古代文化』30－1，20～27

梶山勝　1992「中国嶺南地方の墓制－新石器時代晩期を中心として－」『古代文化』43－11，13～25

鹿野忠雄　1952「先史学より見たる東南亜細亜に於ける台湾の位置」『東南亜細亜先

史学民族学研究』2，89〜186

広東省博物館（楊豪他）1983「広東高要県茅崗水上木滸建築遺址」『文物』1983－12，31〜46

広東省博物館　1984「広東南海県鼇崗貝丘遺址発掘簡報」『考古』1984－3，（203）〜(212)

広東省博物館他　1990「広東珠海市淇澳島東澳湾遺址発掘簡報」『考古』1990－9，(797)〜(802)

広東省博物館他　1991「高要県龍一郷蜆殻洲貝丘遺址」『文物』1991－11，8〜13

広東省文物考古研究所他　1998「珠海平沙棠下遺址発掘簡報」『文物』1998－7，4〜16

銀洲遺址聯合考古隊（袁靖、趙輝）1995「柱状取様法在貝丘遺址発掘中的応用」『中国文物報』6月25日

区家発　1993「浅談長江中下游諸原始文化向広東地区的伝播與消亡」『嶺南古越族文化論文集』香港博物館，24〜33

区家発，莫稚　1998「元朗下白泥呉家園沙丘遺址調査試掘工作報告」『香港考古学会会刊』14，5〜40

厳文明　1991「珠海考古散記」『珠海考古発現與研究』広東人民出版社，227〜232

甲元眞之　1993「中国先史時代の漁撈」『考古論集』潮見浩先生退官記念事業会，845〜858

呉偉鴻　1998「珠江口史前遺址分布規律」『香港考古学会会刊』14，41〜61

後藤雅彦　1996「良渚文化と東南中国の新石器文化」『日中文化研究』11，171〜179

上海市文物保管委員会　1978「上海馬橋遺址第一、二次発掘」『考古学報』1978－1，109〜137

珠江三角洲地区考古調査小組　1995「珠江三角洲地区史前遺址調査」『中国文物報』11月26日

朱非素　1984「広東新石器時代考古若干問題探討」『広東出土先秦文物』広東省博物館、香港中文大学文物館，13〜29

朱非素　1995「広東考古新発現幾点思考」『東南亜考古論文集』香港大学美術博物館，295～304

商志馨，毛永天　1997「香港地区新石器文化及與珠江三角洲地帯的関係」『考古学報』1997－3，255～284

深圳博物館他　1990a「深圳市大鵬咸頭嶺沙丘遺址発掘簡報」『文物』1990－11，1～11

深圳博物館他　1990b「広東深圳市大黄沙沙丘遺址発掘簡報」『文物』1990－11，12～20

石峡発掘小組　1978「広東曲江石峡墓葬発掘簡報」『文物』1978－7，1～15

曾騏　1995「環珠江口両側的史前文化」『東南亜考古論文集』香港大学美術博物館，285～294

蘇秉琦，殷瑋璋　1981「関於考古学文化的区系類型問題」『文物』1981－5，10～17

趙善徳　1991「前山鎮水涌、猫地遺址調査」『珠海考古発現與研究』，125～136

陳国慶　1991「中原地区和東南沿海地区鴨形壺」『東南文化』1991－5，227～229

唐振雄，李子文　1991「淇澳島亜婆湾、南芒湾遺址調査」『珠海考古発現與研究』，57～69

鄧聰　1990「香港和澳門近十年来的考古収獲」『文物考古工作十年』文物出版社，364～375

鄧聰，商志馨，黄韻璋　1997「香港大嶼山白芒遺址発掘簡報」『考古』1997－6，54(534)～64(544)

鄧聰　1998「環状玦飾研究舉隅」『東亜玉器』I 香港中文大学中国考古芸術研究中心，86～99

中村慎一　1996「良渚文化の滅亡と「越」的世界の形成」『文明の危機－民族移動の世紀』『講座文明と環境』5 朝倉書店，181～192

西江清高　1995「印紋陶の時代の中国東南部」『日中文化研究』7，138～151

西谷大　1997「中国東南沿岸部の新石器時代」『国立歴史民俗博物館研究報告』70，1～38

傅憲国　1988「論有段石磨和有肩石器」『考古学報』1988－1，1～35

福建省博物館　1976「閩侯曇石山新石器時代遺址第六次発掘簡報」『考古学報』1976－

1　83～120

福建省博物館　1984「閩侯溪頭遺址第二次発掘報告」『考古学報』1984－4，459～501

彭適凡　1981「江南地区印紋陶問題学術討論会紀要」『文物集刊』3，1～9

香港古物古跡辦事處　1997「香港湧浪新石器時代遺址発掘簡報」『考古』1997－6，35(515)～53(533)

香港中文大学中国研究所，中国考古芸術研究中心　1996『澳門黒沙遺跡』中文大学出版社

香港博物館編　1993『嶺南古越族文化論文集』香港市政局

宮本延人　1985『台湾の原住民族ー回想・私の民族調査』六興出版

楊式挺　1986「広東新石器時代及相関問題的探討」『史前研究』1986－1・2，63～82

楊式挺，陳志傑　1981「談談佛山河宕遺址的重要発現」『文物集刊』3，234～243

米沢容一　1987「台湾の考古学史1戦前」『台湾の民族と文化』六興出版，221～226

李果　1997「環珠江口新石器時代沙丘遺址的聚落特色」『考古』1997－2，63(159)～68(164)

李岩　1989「珠江三角洲地区新石器時代晩期至青銅器時代早期文化遺存的分期」『東南アジア考古学会会報』9，23～33

李子文　1991a「淇澳島後沙湾遺址発掘」『珠海考古発現與研究』，3～21

李子文　1991b「唐唐鎮大塢環、鶏山遺址調査遺跡」『珠海考古発現與研究』，104～112

李平日他　1991『珠江三角州一万年来環境演変』海洋出版社

梁振興，李子文　1991「三竈草堂湾遺址発掘」『珠海考古発現與研究』，22～33

追記

本稿初校の段階にて、珠海市宝鏡湾遺跡の報告書概報（珠海市博物館1999「広東珠海市宝鏡湾遺址試掘簡報」『東南文化』1999－2，72～80）を確認した。鼎足、石錘（Ⅰa類を主とするが、中央に溝が走るものを含む）、玉玦などの出土遺物が報じられていた。詳細な検討を加えることができなかったが、中核的な遺跡の一つとして考えられる。